

作者の感情表出と鑑賞者への感情喚起

源河 亨 (Tohru Genka)

日本学術振興会・東京大学

本発表では、表出的性質を考えるうえで必要な予備的考察を行う。さらに、表出的性質を、作者の感情の表出とみなす理論（表出説）と、鑑賞者に感情を喚起する力とみなす理論（喚起説）が、直観的には正しそうにみえるものの、ほとんど支持されていない理由が何なのかを説明する。

1 聞こえる感情／感じる感情

「このメロディは悲しい」と判断するとき、その悲しみは、メロディに帰属させられているのであって、鑑賞者に帰属させられているのではない。つまり、悲しみは、メロディがもつものとして聴かれている感情であって、鑑賞者が自分の状態として感じる感情ではない。

この点を簡潔に説明するものとして O.K.バウズマの次の文言がよく引用される。「音楽にとっての悲しみは、サイダーにとってのゲップのようなものではなく、リンゴにとっての赤さのようなものだ」。音楽の悲しみは、サイダーを飲んだ人の側に生じる出来事ではなく、リンゴを見た人がリンゴの性質として見てとる赤さのように、主体の特徴ではなく対象の特徴として経験されるものなのである。表出的性質は、対象に帰属させられる性質として説明されるべきものなのだ。

2 問題となる事例

音楽はさまざまな理由から「悲しい」と呼ばれうる。たとえば、自分が悲しみを抱いていたときに偶然流れていたどんな曲も、自分にとって「悲しい曲」になりうる。また、葬式などの悲しい場面で使われがちな曲は、一般的に「悲しい」と呼ばれうる。さらに、悲しい内容の歌詞や題名、標題がついた曲も、「悲しい曲」と呼ばれうる。

こうした感情用語の適用には、個人的・社会的連合や言語情報が寄与している。これに対し表出的性質の議論では、歌詞や標題がない純粋器楽音楽（pure instrumental music）の聴取に連合が介在しない例が扱われる。つまり、音の配列そのものに感情用語の適用を促す要素があるのではないか、それは何か、が問題となっている。

3 表出的性質の理論

表出説 (expression theory)

表出的性質は、作者の感情状態を伝える役割を果たすものである。泣き顔が主体の抱いた悲しみを表出しているのと同様、音楽の悲しみは作曲者の悲しみを表出している。

喚起説 (arousal theory)

表出的性質は、鑑賞者に特定の感情を喚起する傾向性である。たとえば、悲しい音楽は悲しみを、楽しい音楽は楽しさを、怖い音楽は恐怖を鑑賞者に生み出すものである。

隠喩説 (Metaphorism)

音楽の記述には様々な隠喩が使われる(鋭い、脆い、ぎこちない、等々)。音楽の記述は隠喩の一般理論で説明されるので、感情との関係を取りわけ重視すべきではない。

類似説 (resemblance theory)

表出的性質は人の表出行動と似たものとして認知されるものである。たとえば悲しいメロディは、悲しい人の声のように、テンポが遅く音程の上下が少ない(抑揚がない)。表出的性質は本物の感情の表出ではなく、表出に似たものにすぎない。

ペルソナ説 (persona theory)

表出的性質は感情を抱く人物(ペルソナ)を想像させ、その人の感情の表出として聴かれているものである。ただし、ここで言われる「想像された人物」は、作曲者や鑑賞者といった具体的な人ではなく、「誰か」という不確定な主体である。

4 表出説と喚起説の問題

表出説と喚起説は直観的には正しように思えるが、それに反して、現代ではほとんど人気がない。二つの理論には似たような欠点がある。

表出説の問題

- (1) 作曲者の感情を記述する用語と、音楽を記述する感情用語が一致するとは限らない。作曲者は、自分が抱いた悲しみを払拭しようとして、楽しい曲を作るかもしれない。
- (2) 説明の順番が逆転している。作者が自分の悲しみを伝えようと思ったら、「悲しい」と呼ぶことがふさわしいと認められている特徴を曲に入れる選択がなされる。悲しみを伝えようという意図があればどんな曲でも「悲しい曲」にはなるわけではない。

喚起説の問題

- (1) 鑑賞者の感情を記述する用語と、音楽を記述する感情用語が一致するとは限らない。楽しいときでも、あるメロディを聴いて「悲しいメロディだ」と判断できる。
- (2) 説明の順番が逆転している。悲しいメロディを聴き、何らかの意味でそれに同調することで(感情移入・感情伝染により)、鑑賞者が悲しみを抱くことはある。鑑賞者が悲しみを抱いた理由が表出的性質によって説明されるのであって、逆ではない。

もちろん、表出説や喚起説を擁護する人もいることはいるが、現在の議論では類似説とペルソナ説の対立が主流となっている(隠喩説については松永発表を参照)。

以上の概説に関して、より詳しくは以下を参照。

源河亨(2017)「音楽は悲しみをもたらすか: キヴィーの音楽情動について」, 『美学』 68巻2号, 97-108. (<https://bit.ly/2ykgo5R>)

——— (forthcoming) 「悲しい曲のどこが「悲しい」のか?: 音楽のなかの情動認知」, 『科学哲学』, 51巻2号 掲載予定. (<https://bit.ly/2IAMSNN>)